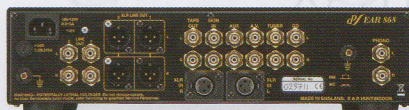




## EAR EAR 868 PL

¥1,029,000

**Spec** ●出力: Phono × 1 (868PL)、XLR × 1、RCA × 5 ●入力: XLR × 2、RCA × 2 ●入力感度: MM 2.2mV (868PL)、MC 0.24mV (868PL)、Line 200mV ●入力インピーダンス: MM 47kΩ (868PL)、MC 40Ω (868PL、4Ω/12Ωの選択可)、Line 200mV ●サイズ: 380W × 100H × 305Dmm ●質量: 10.0kg ●取り扱い: ヨシノレーディング (株)



EAR 868 PLの背面部。フォノセクションがつかないEAR 868 L (¥732,900) もラインアップされる

# スタジオ用の銘機を民生用として再構成 トランスの設計の達人が手掛けたモデル

## トランス設計の達人による 他に比類のない独自の音

タイム・テ・パラビッチーニの最高傑作ともいわれるのが、管球式プリアンプEAR 912である。長年の経験と研究から生まれた回路設計はトランス結合という形でこの製品に集約されているが、スタジオ用プロ仕様このモデルを民生用として再構成したのが本機EAR 868 PLである。MM/MC対応のフォノステージを内蔵し、増幅はPCC88(7DJ8)で行われる。

パラビッチーニはトランス設計の達人でもあるが、それだけに真空管の種類にはこだわらないという。むしろ長期の安定供給を第一に選定するようで、それに合わせたトランスの設計の方が重要であるようだ。

こう考えるとEARの特異な位置づけが理解できる。それは真空管の音でもトランスの音とすべきなのかもしれない。少なくともEARから真空管を強調した音を聴いたことはないし、もちろんソリッドステートとは明らかに異なる。他に比較するものがない独自の音が、その立ち位置を比類のないものとして持っているといいたい。

## 輪郭が明瞭で実在感が高く 比べるものがない再現性を持つ

大づかみない方をすれば、その特徴は第一に輪郭の明瞭さ、第二にディテールの精密さといえることができそうだ。レンジの

広さを格別強調した形跡はないが、レスポンスは均一で高低両端でも弱さを見せることがない。例えばチェロでは豊かで瑞々しい響きを持ちつつ、深い音域まで沈んでぐっと押し出すような力強さが印象的だ。またアカペラではひとりひとりの声がかくつきりと分かれ、それぞれの位置感が手に取るような明瞭さで描き出される。ハーモニはふくよかだがふやけた甘さがなく、密度の高い存在感の重さを感じさせる。これが実在感の高さにつながっている。

第二に挙げた精密さというのもこれに関わりがあるが、アカペラなら声を潜めた時の余韻の残り方、一音一音の発音の立ち上がりなどごく細かな部分が、細かいだけでなく厚手の質感で引き出されているということである。ピアノの弱音部を聴くと、その音楽的なニュアンスの濃度、表現の重さというものを実感することができる。ギターもそうで、決して音量を上げなくても存在の手応えが重量感を持つのである。これが緻密さというもので、いかに細かな信号がエネルギー豊かに取り出されているかという現れといいたい。オーケストラやジャズも同様だ。それが追従を許さない位置を築き上げてきたゆえんである。

アナログでも出てくる音数の多さに驚く人が多いだろう。これも結局前記と同じで、信号の取り出し方が精密なのである。厚みとダイナミズム、そして表情の濃さ、生き生きとした彫りの深さ。実に比べるものがない再現性といいたい。

TEXT  
井上千岳  
Chitake Inoue

Photo by 田代法生